HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	市場は悪か ： ポランニー『大転換』の批判的読解から探る
著者	見附，陽介
引用	北海商科大学論集，14(1)：20-41
発行日	2025-02-21

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

 受理日:2025/02/21

市場は悪か
—— ポランニー『大転換』の批判的読解から探る ——
Are Markets Evil ?
A Critical Examination of K. Polanyi's *The Great Transformation*

見附　陽介　MITSUKE, Yousuke

要旨

本稿では、しばしば諸論議の前提に置かれる市場の「非道徳性」について検討し、社会的課題と市場機能との関係の意義を探る。その際に、市場の非道徳性を強調する議論としてとくにカール・ポランニーの議論を参照し、その批判的読解から市場をその固有性において非道徳的なものとみなす視点の問題点を指摘する。この批判的読解において論点となるのは、市場と資本主義の同一視である。フェルナン・ブローデルの市場と資本主義に関する歴史研究を一つの参照点として、市場と資本主義の間を区別する立論の可能性を検討し、そのような区別が規範的議論において持つ意義を、新自由主義批判との比較も交えながら考察する。

キーワード：カール・ポランニー、フェルナン・ブローデル、市場、資本主義、新自由主義

Abstract

This article examines the "immorality" of markets and explores the significance of the relationship between social issues and markets. From a critical perspective, it focuses on Karl Polanyi's argument, which portrays the market as a "satanic mill." The problem with Polanyi's argument is that it conflates the market mechanism with capitalism. By distinguishing markets from capitalism, Fernand Braudel presented their historical relationship and, in particular, clarified how capitalists controlled markets. On the basis of Braudel's study, one could argue that the causes of social issues should be attributed not to markets but to capitalism. The article confirms the significance of this idea by comparing it with several analyses developed in critical studies of neoliberalism.

Keywords: Karl Polanyi, Fernand Braudel, market, capitalism, neoliberalism

１．はじめに

本稿では、しばしば諸論議の前提に置かれる市場の「非道徳性」について検討し、社会的課題と市場機能との間の関係性とその社会的意義を探る。その際に、市場の非道徳性を強調する議論としてとくにカール・ポランニーの議論を参照し、その批判的読解から市場をその固有性において非道徳的なものとみなす視点の問題点を指摘する。批判的読解において論点となるのは、市場と資本主義の同一視である。

ポランニーの議論は、ジョン・ラギーによっていわゆる「埋め込み」理論として再構成され（Ruggie 1982）、第二次世界大戦後の国際的な政治経済体制を理解するための基本的な視角を形作ってきており、参照元となったその重要性はよく知られている。また、同じ文脈から近年では新自由主義への批判においても重要な参照点となっている。しかし、もしこれらの議論に、ポランニーの議論を参照するが故にポランニーの議論に向けられる批判的検討と同じものが適用され得るのだとすれば、本稿の議論は単なるポランニーに対する批判的検討を超えてより広い意義を持つことになるだろう。

議論の方向性をわかりやすくするために述べておけば、筆者は新自由主義に体現される資本主義の先鋭化とそれがもたらす不合理な格差の拡大や社会の解体プロセスを是としない立場である。つまり、ここでポランニーの議論に対する批判的読解を行うのは、ときに見られるように現行の資本主義社会を自由の名の下に擁護する（越後 2011）ためではない。そうではなく、本稿が批判的読解を試みるのは、資本主義と関連する諸問題を、フェルナン・ブローデルが提起する市場と資本主義とを区別する分節化のなかに置き入れることによって、従来の議論とは異なる視角から眺める可能性を検討するためである。

このようにポランニーとブローデルを比較する際の背景には、資本主義の働きと影響に関する理解における両者の類似と相違がある。ブローデルは歴史において商業資本が持った一種の支配権力の作用を論じる。そして、その点ではポランニーもまた同様に歴史における商業資本による生産部門の支配を論じている。にもかかわらず、両者の間には重要な相違があり、これが資本主義と市場の関係に対する理解に大きな影響を与えることになる。なお、資本主義の働きと影響に関する理解において、デイルが述べるように、ポランニーはその経歴を通じてマルクス主義的理解に対する「接近と離反の二重運動」（デイル 2020）を辿った。その限りで、その議論はマルクス主義的解釈を受け入れる部分とそうではない独自性の部分を持つのであるが、本稿では著作『大転換』において明確な形をとったところの「市場社会」論においてポランニーが立つと思われる後者の方向性（しかし、それは規範における社会主義的方向性の放棄ではなく、あくまで分析としての資本主義社会の理解における方向性）に即して検討を展開する。本稿第４節でも別の文脈から触れることになるが、デイルが述べるように「マルクスにとって一般化された商品交換と大規模なプロレタリア化は同じコインの両面であるのに対し、『大転換』では、十九世紀資本主義の社会的・文化的な腐敗の根源が労働力と自然の商品化および搾取と支配にではなく、前者にのみ求められている」（デイル 2020: 128, 強調は原著者）という特徴がポランニーの議論には認められ、この点がポランニーとブローデルにおける資本

主義と市場の関係に対する理解の相違をもたらすことになる。

ポランニーとブローデルの比較という点では、山下範久も自身独自の「帝国」論を展開する際の前景をなすものとしてポランニーとブローデルの比較を行っている。この比較においては、二人の議論から導かれる見通しが「共通して暗い」（山下 2002: 75）と結論づけられる。しかし、本稿ではより積極的な方向性として、近年展開されてきたポランニー研究および新自由主義批判の蓄積なども踏まえて、市場と資本主義との関係から生まれる社会的課題のより具体的な解決に向けた制度主義的分析のための下地づくりを目指す。

２．「悪魔のひき臼」としての市場

資本主義に対する批判的な見解の中で、市場がもたらす非道徳的な帰結に対する非難の言葉が示されるのは一般的であるように思える。とりわけ新自由主義の方針が強く打ち出され、貧富の格差拡大に対処する新自由主義的な国家行政の無力あるいは無気力が明らかとなった世界情勢において、市場経済の抑制あるいは否定の意見が提示されてきた。そのような今日の資本主義批判の言説において、市場を「悪魔のひき臼」とみなすポランニーの議論は一定の評価を得ていると思われる。

「悪魔のひき臼」とは、人々の元来の共同体を破壊し、「人間を浮浪する群衆へひき砕いた」（ポランニー 2009: 59）とポランニーが考えるところの市場の働きを指したものである。ポランニーの市場批判の要点は、当初コミュニティの中に埋め込まれた一部分に過ぎなかった市場が、そこから切り離され、自己調整的メカニズムによって作動する市場システムとして自立し、そしてついには共同体を飲み込み破壊するようになることへの批判にある。したがって、当然ながら市場に対置される規範は共同体（コミュニティ）の維持あるいは再建に置かれることになる。この共同体の維持・再建という規範とそれに対する市場の「破壊作用」（ポランニー 2009: 68）への批判という構図は、『大転換』後のポランニーの議論においても一貫して維持されている。

「労働者は、いわゆるイギリスの工業都市と呼ばれた新たな荒廃の地へと押し込まれ〔…〕、農村の人々は、人間性を奪われて、スラムの住人と化し〔…〕、家庭は、破滅の淵に沈み」（ポランニー 2009: 67-8）ゆくことの原因を、ポランニーは「悪魔のひき臼」たる市場システムに求めたわけだが、ここにはある種の古典的な道徳観がうかがわれる。つまり、ポランニーは自己調整的市場メカニズムを、「人間社会の歴史において妥当であるとみなされたことのほとんどなかった動機、また毎日の生活における行動や振舞いを正当化する基準であるとはけっして認められることのなかった動機、すなわち利得動機」（ポランニー 2009: 49）から導き出されたシステムと理解し、それを批判している（注1）。

このようなポランニーの議論に対する批判としては、マレー・N・ロスバードによるものが知られている（越後 2011）。しかし、ポランニーの議論の読解に即して本稿において展開する批判は、ロスバードのそれのような急進的な資本主義擁護のための、あるいはそこから派生した新自由主義擁護のための批判ではない（注2）。本稿の批判は、ポランニーが問題視した「破局

的災厄」（ポランニー 2009: 68）の観点は共有しながらも、その原因を市場に求めたポランニーの分析に向けられる。もっと具体的に言えば、資本主義と市場のメカニズムを同一視することで、資本主義に帰せられるべき問題が誤って市場メカニズムに帰せられているのではないかという疑念に立った批判的読解が本稿の目指すものである。したがって、ポランニーの議論の批判的読解として、市場メカニズムと資本主義の切り分けの可能性を検討することが、最初の論点となる。

３．市場と資本主義の関係に関するブローデルの歴史理解

アナール学派の中心的人物として知られるフェルナン・ブローデルもまた、ポランニーの議論を批判した一人である。主な批判の対象となったのは、ポランニーの歴史理解であった。たとえば、ポランニーは 19 世紀以降の社会を、利得動機に導かれた自己調整的なメカニズムに基づいて作動する市場システムが社会を支配する状況、いわゆる「市場社会」として描き、他方でそれ以前の経済を、家政、互酬性また再分配という形をとる非市場的な経済、つまり社会の中に埋め込まれた経済として描くのだが（当然ポランニーは後者を規範とする）、ブローデルは市場の歴史に関するその浩瀚な記述の中でそのような対比の構図を批判する。曰く、「歴史の具体的で多様な現実」（ブローデル 1986: 280, 強調は原著者）に基づくならば、自己調整機能による市場システムの自律を否定する際の条件となるはずの「価格の統制」は 19 世紀以前と同様に今日まで存在しており、また他方で 19 世紀以前の価格の統制（社会への市場の埋め込み）が需要と供給の役割を廃していたと考えるのも誤っている。端的に言えば、「ポランニーが好んで口にする非−市場の傍に、昔から、つねに純粋に利潤追求を目的とする交換がいかに小規模であれ存在したということ」（ブローデル 1986: 282）をブローデルは強調する。

しかし、本稿で検討したいのは、ブローデルが市場と資本主義の歴史研究において提示する上記の議論と関係しながらも、それとは別の論点となるもの、すなわち市場と資本主義の区別という問題である。これを本節で検討したうえで、次の第 4 節においてそれがポランニーの議論に対して持つ批判的意義を確認したい。

３−１　市場は資本主義と等置されるか

資本主義を近代産業システムと捉え、そしてその限りで 19 世紀以前には「『本物』の資本主義」はなかったとする考えをブローデルは否定する。それは、過去の経済において常に「資本主義」と「非−資本主義」が併存した「二分肢性」を見落とし、資本主義の「トポロジーとでも呼びうるものの意味の理解を放棄すること」（ブローデル 1986: 299）になるからである。

ここでトポロジーというのは、ブローデルが検討した市場の歴史に基づくものである。ブローデルは人間の経済生活に作業仮設として三区分を設け、基礎に「多種多様の自給自足的、旧套墨守的な『物質生活』」を置き、「その上に、より明確な形をもつ経済生活があり、〔…〕最後に、最上階に、資本主義の活動がある」（ブローデル 1988: 210）と想定する。物質生活においては、自給自足の他に「非常に狭い範囲で行われた、生産物とサービスとのあいだの物々交換

の活動」（ブローデル 1985a: 3）なども含まれる。また、これは歴史的にはアンシャン・レジーム下の「領主経済」（ブローデル 1985b: 33）に引き継がれているものである。それは「深刻な不均衡・非対称的成長・非合理的かつ非生産的投資」を伴う「＜旧体制＞経済」（ブローデル 1985b: 321）でもあり、またそれは「しきたりの支配のもとに」（ブローデル 1985a: 11）あるものでもあった。

これに対して、中階の経済生活とは、市場経済であり、「農村活動・屋台店・工房ないしは作業場・商店・取引所・銀行・大市、そして当然ながら市と結びついた、生産および交換のメカニズム」（ブローデル 1985a: 2）が働く領域である。この市場経済に関して、その基本特性は「『透明さ』と『規則性』」にあるとブローデルは考えている。「そこでは各人が、共通の経験に教えられて、前もって交換の過程がどのように展開するかを知ることができる。都市の市における、日々の生活に必要な購買と販売の場合がそれであって、金対商品あるいは商品対金で、即座に取引成立の時点で完了する。小売商人の店舗の場合もそうである。また、たとえそれが広い範囲に及ぶものであっても、その出発点、条件、道筋、到達点が明白に知られているすべての『正常な』商取引の場合もそうである。〔…〕要するに、たいていは古来の、無数の通商路であって、誰でもその道筋・暦・高低差を前もって知っている――したがって、正常に競争に対して開かれているのである」（ブローデル 1988: 210）。あるいはこうも言っている。「『仲介者なしの』販売がほとんどを占める初歩的な市は、交換のもっとも直接的な、もっとも透明な形態であって、もっとも監視の眼も行きとどき、騙される危険が少ないのである。もっとも公正なと言ってもよかろうか」（ブローデル 1986: 13）。

しかし、この「市場の広大な表面の上側には、〔…〕みずからの利益のために交換を歪めたり、既成秩序を突き崩したり、〔…〕故意に、あるいは明白な意志はなくても、変則的な状態や《乱れ》を作り出し」（ブローデル 1985a: 3, 強調は原著者）たりする階層が置かれる。透明な市場経済に対してこの市場の上部は、市場の下部にある無定形な物質生活とともに「不透明地帯」（ブローデル 1985a: 2）と捉えられている。この市場の上部こそが、「資本主義がそこに宿り、そこで繁栄している」（ブローデル 1985a: 3）層である。

このような位置付けに基づき、ブローデルは「資本主義と経済の間の対立」（ブローデル 1988: 210）を提示する。資本主義をなす上部の階層は「反−市場」（ブローデル 1986: 284）であるとすら言われる。具体的な例を挙げると、「バルト海諸国の穀物は、市場経済の正常な交換に属している。ダンツィヒにおける買い入れ相場は、そのカーブにおいて、規則的にアムステルダムにおける売り値を追っている。しかし、一度都市の倉庫に積み上げられると、小麦は階を変える。その時以後それは、特権的なゲームに属し、そこでは大商人のみが発言権をもち、それをきわめて多様な場所、飢饉のために小麦の価格が購入価値とはまったく比較にならないほど上昇した所、また、それが渇望されている商品と交換できる所へと送り出すであろう。〔…〕資本主義の大がかりな勝負の場は、習慣的でないもの、すなわち規格外のものに、あるいは何ヶ月もの、さらには何年もの時間のかかる遠隔地との結合にある」（ブローデル 1988: 210-1）。いわば穀物は、余計な経費をかけてでも倉庫に長期に保管され、交換に入ることを一時保留さ

れるが、それは投機的な視点とともに、最も利潤を得られる交換に供するためである。これは市場経済がもたらす事態ではなく、それを最も有利な形で利用しようとする、そしてそのためには生産と消費の間に置かれた透明な交換を一時的に止めもする資本主義によってもたらされるものと言える。透明な市場の交換にとって、それは不透明な地帯からなされる不透明な操作なのである。

ブローデルが述べる資本主義と非-資本主義の二肢性はここに関わる。たとえば小麦に関して、「自家消費的であるとき、それは物質生活の基層に位置する。習慣的に穀倉から、それらに対して『立地上の優位』を保っている近くの都市まで運ばれるとき、それは近距離の正規の商業である。州と州の間では、それは、不正規の、ときには投機的な商業である。最後に長距離にわたり、飢饉という激烈でくり返し起こる危機の際には、ひじょうに大規模な商業の活発な投機の対象である。そしてその度に、商業社会の階を一つずつ昇ることになる」（ブローデル 1988: 213）。ブローデルは、「もし私がゾンバルトのように体系的説明と決定的断定への嗜好をもつとすれば」という但し書きのうえでだが、次のように述べる。「私はすすんで、賭け・投機を資本主義的発達の最大の要因として前面に押し出すことであろう。本書において、随所に、賭け、リスク、欺瞞というあの裏に隠れた観念が現れるのが見られた。そして基本的ルールは市場の通常のメカニズムと手段に対して一つの裏をかく手を作り出すことであり、市場を、逆方向にとは言わないまでも、別なように機能させることであった」（ブローデル 1988: 371-2, 強調は原著者）。

ブローデルは、自身が展開するこの議論について、「市場経済と資本主義とを、あまりに截然と区別し、ひいては項どうし対立せしめることになりはせぬか」と自問したうえで、調べ上げた歴史的事項の積み重ねを通じて「ついにこのように認めるにいたった」（ブローデル 1985a: 3）と自答している。しかし、ブローデルのこの見解の根拠を理解し、市場あるいは市場経済と資本主義との区別の意義を明確にするためには、市場と資本主義の間のより詳細な位置付けが必要である。制度主義的な観点に立つ関係性の理解と見通しを得るためにも、これを以下の小節でやや細部に立ち入って確認したい。

３－２　資本主義の展開

３－２－１　商業資本主義

ブローデルは、資本主義による様々な領域への侵入を歴史的具体像として描き出す。ブローデルは、「真の市場経済ではない、それどころかきわめて多くの場合その反対物である」（ブローデル 1986: 4）ところの領域を指して、資本主義という言葉を使うが、その内容についてはもう少し詳細な記述が必要だろう。

ブローデルは、資本、資本家、資本主義という言葉の意味をやはり歴史の具体的姿から描き出す。その確認作業の一つひとつをここで追うことはできないが、言葉の具体的な意味は定義しておこう。ただし、ブローデルの行った確認作業自体が言葉の一義的な定義が困難であることを示すものであったこともまた念頭に置いておく必要がある。まず「資本」とは、「利潤を生

む金銭」（ブローデル 1986: 293）あるいは資産（しばしば過去の労働の結果として成立する）と言ってよいだろう。資本家とは、いうまでもなく、そのような資産あるいは「『金銭資産』の保持者」であり、また「金銭の操作者、資金提供者」（ブローデル 1986: 294）である。そして資本主義とは、労働の関与を通じて資本が「再生すること、再建され大きくされること、収入を生み出すこと」（ブローデル 1986: 301）を可能にする体制ということになる。もちろん、このような抽象的な定義であれば、資本主義なるものが近代以前にも存在したと言えるのは当然のことであり、まるで近代以降の産業社会と前近代の社会には違いがないということになってしまいそうである。しかし、当然そこには違いがあり、ブローデルは、その違いを資本の「再生産率」（ブローデル 1986: 307）から捉える。

産業革命以前の社会においては、たとえば木製の歯車に見られるように経済活動において資本の損耗率は非常に大きく、したがって資本の再生産率は低かった。そこでは資本の拡大再生産、すなわち利潤の獲得を経済活動の目標に据える資本主義は目覚めない。生命の必要による消費とそのための生産、そしてそれらをつなげる交換があるのみである。この損耗率の高さのために、産業革命以前、資本主義はまずは商業資本主義として成立し、その活動の場を流通の領域に持つことになった。別の言い方をすれば、この高い損耗率をもたらす経済技術構造のゆえに、製造業および農業にはわずかな資本形成しか許されなかったのである。資本の再生産を目指す経済活動としての資本主義、したがって利潤の追求という目標とその合理的、効率的達成として利潤の極大化を目指す資本主義は、近代以前には商業というある特定の部門のうちに「閉じられた、さらに言えば殻をかぶったシステムとして生き」ることしかできず、「容易に他の部門へ移り住むことができず、社会全体を征服することができなかった」（ブローデル 1986: 311）。

この文脈においてブローデルが産業革命に認める一つの変化は、「固定資本の変化」である。つまり産業革命によって、固定資本は「より高くつくがはるかにより長持ちがし完成度の高い資本となり、生産性を根本的に変化させることになった」（ブローデル 1986: 310、強調は原著者）とブローデルは捉える。そしてその限りで、資本主義の産業領域への侵入が可能になった。資本主義は産業革命以前からあったが、産業革命あるいはそれをもたらした技術革新が、資本主義による商業以外の領域、すなわち工業生産と農業生産という広範な社会領域への侵入と征服を可能にしたということである。

資本主義は流通領域に固有の生息地を持ったが、しかしブローデルによれば「伝統的な交換、ひじょうに狭い範囲の市場経済には、資本主義はほとんど関心を示さない」。大商人によって担われる資本主義は、ときに商店主や小売人といった市場経済の担い手を使いながら、「商業社会の頂点という高い位置」に陣取り、またそのために資本主義による「法的あるいは事実上の独占、価格操作が可能になる」とされる。そして、「そうした位置の高さこそ、資本主義の実像の主要な特質」（ブローデル 1988: 102）だとみなされる。

この頂点を含んだ商人のヒエラルヒーは、商業活動における分業とともに作り出される。最初は、商取引の距離の延長や種々の異なった通貨を扱う必要などから、14 世紀に「小売商人と

卸売商人の分離」（ブローデル 1988: 105）が始まる。とくにこの商取引が大規模化すればするほど、その分離は強くなり、大規模な商取引を担うに足る信用と資金を持つ大商人が、代理人や仲買人を使って商取引を行い、そして販売において小売商人に指示を出すようなヒエラルヒーが形成される。ヒエラルヒーの下層は、現金出納係、簿記係、外交員、代理人、仲買人、荷馬車業者、水夫、飛脚、荷造り係、人足、仲仕など様々な職種へと専門化され「商業プロレタリア」（ブローデル 1988: 106）を形成する。また、ここには常に高利貸しが相伴う。たとえば、アメリカ発見の時代のスペインにおいて、「基礎部には、農民、羊飼い、養蚕家、職人、そして行商人であって短期貸しも行う regatones がいる。彼らの上に、彼らを手中に納めて操るカスティーリャの資本家たち、そして最後にこれら資本家たちの上にフッガー家の駐在員たちがいて、すべてを統御している。そして、少し時代を下ると、ジェノヴァ人たちが彼らの権力を誇示するのである」（ブローデル 1988: 108）。他方で、この統括的位置のゆえに資本主義自体には不分割性が必要とされ、専門化は進まず適応性こそが求められることになった。「全世界を相手にして富を築いた輸出入業者」である大商人は、「国内商業で満足」する者たちとは「まったく別の階級」（ブローデル 1988: 111）を形成することになる。

このようにして商業社会の頂点に位置付けられる資本主義に関して、権力という視点からの特徴づけも重要である。商人にとって市場における厳格な規則は商取引の妨害物と捉えられた。そのため「行政的拘束と監督から解放されようと自ら進んで力を尽くす活動的グループ」がつくる「自由な、あるいは自由であろうと努める市場」と「監視される市場」との二つの流通が生まれた。興味深いのは、「監視される市場」においては、市の公正さと都市の消費者の利益の保全のために「競争を保ち続ける」ことが目指されていたということである。すなわち、「公立の市が供給と需要の間の具体的なつき合わせの手段となる」がゆえに、「すべての商品が強制的に公立の市に集まらねばならない」というように規制がされていた。その際の「市の変動する価格決定は、このつき合わせの表現以外のものではありえ」（ブローデル 1988: 153）なかった。それに対して、自由を追求するプライベート・マーケットは「競争を排除し、交換のより上の階の活動における資本主義と結局のところ同じ道をたどる、一つの小資本主義を、基層部において促進する傾向を持つ」ものであった。具体的には、「代金の前払いおよび信用の初歩的な操作を活用して、市場の価格の外に身を置く」ことや、「収穫の前に小麦を、剪毛の前に羊毛を、ぶどうの取り入れの前にぶどう酒を買うこと」、あるいは「商品を倉庫に寝かせるという手段を利用して物価を操作すること、そして最終的には、生産者を自分たちの意のままにすること」（ブローデル 1988: 153-4）が方法となった。これらは商業社会の頂点に立つその権力によって、市場の「裏をかく」方法に他ならない。この視点を確認する限りで、ブローデルによる次の資本主義の定義が理解可能となる。すなわち、「資本主義とは、（交換の基礎を、たがいに求め合う需要におくのと同程度あるいはそれ以上に、力関係におく）権力の蓄積であり、避けられぬものか否かは別にして、他に多くあるのと同様な一つの社会的寄生物なのである」（ブローデル 1986: 3）。

ブローデルは、「問題は、〔…〕どちらがより良心的でより公正に競争原理にのっとり調整機

能を果たしているかを知ること、さらに一方が他方を捉え籠絡し取り込んでしまう力を持っているかを知ることである」（ブローデル 1988: 153）と述べる。もちろん、このような市場を取り込む力によって競争が排除される最も純粋な形が「独占」（ブローデル 1988: 161）であるのはいうまでもない。商業社会の頂点に位置付けられる資本主義は、利潤を追求するその本質において市場を前提としかつ市場を否定する。それは、市場に介入し、操作し、市場を支配することで利潤の極大化を目指す。支配とは、もちろん市場を否定すること、競争を排除することだけを意味するわけではなく、それが自身にとって有利なときには価格操作とともに存分に使用することも含む。この点は新自由主義との関連からやはり第 4 節で再度論じることになる。

3－2－2　農業および製造業の領域への資本主義の侵入

商業領域に発展した資本主義が農業領域へと侵入する姿を、ブローデルは農村への都市の金銭の侵入という点から捉える。それは具体的には「販売という首の部分でびんをつかむことで生産を遠隔支配する」（ブローデル 1986: 334）形をとる。都市の資本家たちは、東欧の再版農奴制を敷く領主たちに対し「前払い」という「市の規則と価格からの抜け道」（ブローデル 1986: 340）を通じて、市場での競争を避ける形で穀物を購入し、同時に領主たちを資本主義に奉仕させる。領主たちは、「彼自身の奢侈品に対する需要との関連」から、自分の領地において自分が持つ全能を「生産を資本主義の需要に応えうるように組織するために用いた」。再版農奴制の領主たちは、資本主義への奉仕のために「独占」の体制を構築したのである。「一方では、領主がすべての生産手段を独占し、そして他方、彼がすでに活発になっていた市場経済の息の根を完全にとめ、すべての交換手段を自分のために占有してしまわなかったとすれば、農民たちは、彼らの小麦を食べてしまうか、市においてそれを他の財物と交換することの方を選んだことであろう」（ブローデル 1986: 341, 強調は原著者）。

このような領主の全能による農業の支配と、それを通じた農業生産の資本主義への従属あるいは奉仕はアメリカ大陸においてもプランテーションにおける奴隷制として現れる。ブローデルは、金銭で売買できる奴隷を用いたモノカルチャー経済をとる新大陸の農業生産形態は、「第二次農奴制の荘園よりもより直接的に、すぐれて資本主義的な創造物」（ブローデル 1986: 342）だと考える。ブラジルの農場主たちもまた、「資金と商品を前貸しするリスボンの卸売商人とつながって」（ブローデル 1986: 343）おり、「海の向こうでの生産と販売を支配しているのはヨーロッパ商業なのである」（ブローデル 1986: 345）。「一山あてるつもりで、彼が出発点において彼のプランテーションと奴隷の全部ないし一部を買うために借金を背負い込んでいるとしたら、彼はすぐに資金提供者の意のままにされることになるだろう」（ブローデル 1986: 348）。

これらと同様の傾向はもちろん西欧でも生じる。奴隷や農奴を用いる形ではなく地主と小借地農そして経営を担う大借地農からなるなど、その経営形態はいくつかあるが、重要なポイントは西欧の農業においても「利益を上げることに留意し、投資と効率という概念を用いて打算するすべを知っている商人によって活用された金銭の勝利が見られる」という点である。農業は消費のためではなく、利潤獲得を目指して市場において売却するために農産物を生産し始め、

生産作物の専門化とともに「資本主義的『企業』への道」（ブローデル 1986: 366）へと踏み込んでいくことになる。

他方で、製造業に対する資本主義の侵入を確認する際にブローデルは、資本主義を担う都市の商人たちが、「その出発において、都市がその内部において職人的活動の総体を組織するために創り出した『同業組合』の秩序のうちに組み込まれていた」（ブローデル 1988: 23）ということと、そこにおいて両者は対立し闘争したということから確認作業を始める。この闘争において「賭けられているのは、資本主義によるとは言わないまでも、商人による労働力市場と経済的優位の征服」（ブローデル 1988: 25）であった。歴史において知られているように、勝利したのは商人である。ブローデルはその具体的な経緯を、商人が「職人に原料と彼の賃金の一部を前貸し」し、「残金は、仕上げた品物を納めた時に支払われる」ところの「問屋制度」に見ている。このときすでに、貨幣の蓄積の多寡がもたらす「不平等なゲームは始まっていた」（ブローデル 1988: 26）。

これは、生産のみを職人に行わせ、交換すなわち流通と販売そして資金の準備と獲得は商人が握る形態である。「この賃仕事のシステムにおいて、同業組合の親方たちは、しばしば自分もまた賃金労働者となる」（ブローデル 1988: 27-8）。もちろん、このような商人による征服を受けない生産部門も多くあったが、重要なのはそのような自由生産は「近くの市場で容易に原料が手に入り、また、完成品が一般にそこで売り捌くことができるという条件の下でしか可能でない」（ブローデル 1988: 29）という点である。より遠隔地の原料を用いるとき、あるいはより遠隔地まで市場を開拓する必要があるとき、近隣の市場を超えたより大規模な生産を行うとき、職人たちは商人に頼らざるを得なかったのである。ここにまず「職人的生産を変革することではなく、支配することをねらっていた商業資本主義の疑う余地のない最初の徴候」（ブローデル 1988: 32）が見出される。

この流れを発展させたのが、「より明白に資本主義的な組織」（ブローデル 1988: 42）としてのマニュファクチャー（工場制手工業）とファブリック（工場）ということになる。そしてこのような大規模化はいっそう生産における資本の役割を強化する。たとえば「ビール醸造は長い間職人仕事であったが、規模が大きくなり莫大な量のビールを醸造する能力を持つようになるとともに、設備のために多額の出資を必要とする」（ブローデル 1988: 56）ようになるのである。このような商業資本の製造部門への侵入において「力は、市場の主である商業の側にあるので、産業の利潤は、絶えず商業に先取りされることによって、圧迫されていた」（ブローデル 1988: 60）。逆に言えば、このような生産のプロセスそれ自体への資本主義の侵入を可能にしたのが、先に触れた損耗率を低減させる、したがって資本の再生産率あるいは利潤率を上げる固定資産の役割の拡大ということになるのである。生産の近代化は資本の役割を増大させ、またそれゆえ他方で資本家の存在によって近代化は可能となり、そして資本の役割を増大させるこの近代化の進展によって資本主義はその支配権を製造業分野において拡大させたのである。19 世紀における産業の近代化とともに生じた変化は、この資本主義の支配権の拡大であって、ブローデルに言わせれば、それは近代化以前の経済社会に資本主義が存在しなかったこと

を意味するわけでもなければ、19 世紀以前に市場経済が存在しなかったことを意味するわけでもないのである。

４．市場と資本主義の区別が持つ意義

４－１　ブローデルの歴史理解がポランニーの議論に対してもつ批判的意義

市場あるいは市場経済と資本主義を区別するブローデルの歴史理解が、ポランニーの議論に対して持つ批判的意義を確認しておこう。ポランニーが市場あるいは市場経済に認めた共同体に対する「破壊作用」は、ブローデルの議論に基づけば、市場を支配し、自身の利潤の獲得のためにそれを利用する（あるいはむしろ、その裏をかく）資本主義の作用と捉えることができる。

この点は、ブローデルとポランニーの行論の分岐点がよく見えるところである。ポランニーもまた商人による製造部門の支配を論じている。つまり、「中世後期においては、輸出向けの工業生産は富裕な市民（ブルジョワ）によって組織され、彼らの地元の都市においてその直接的な監督のもとに行われた。のちの重商主義社会においては、生産は商人によって組織され、もはや都市に限られることはなくなった。この時代は、資本家的商人が家内工業に原材料を提供した『問屋制』の時代であり、資本家的商人が純粋に利潤目的の事業として生産過程を支配した」（ポランニー 2009: 127）。さらに、ここに画期をもたらしたのが機械の導入であったこともポランニーは述べている。しかも、「機械そのものの登場ではなく、精巧でそれゆえ使用目的のはっきりした機械や設備の発明」が重要であり、それが「長期的な投資とそれに見合うリスクを伴う」（ポランニー 2009: 128-9）ものであったことに言及している。しかし、ポランニーがここから次に導き出したのは、「商品化社会」の必然性とその害悪であった。すなわち、リスクの回避に向けて、生産のための要素としての労働、土地、貨幣の確実な供給のためには、「それを金で買い入れることが可能なものとすること」が必要となり、したがって「市場メカニズムのこれら三つの生産の要素への拡大は、商品化社会に工場システムを導入したことの不可避的な結果であった」（ポランニー 2009: 129）と結論する。かくして、ポランニーの議論は商品化によって共同体を破壊する「悪魔のひき臼」たる市場に対する批判へと至る。

しかし、ブローデルが提示したのは別の視角であった。ブローデルの議論に基づくならば、イギリスの工業地帯における労働者階級の貧困と荒廃は、労働力が商品化され労働市場が開かれたこと自体によって生じたのではなく、その市場を支配し、商業社会の頂点に立つその権力を用いて自身の利潤の極大化を目指した資本主義によってもたらされたと考えることができる。この場合、市場あるいはそこにおける競争の裏をかく歪める働きがあったとすれば、それはもちろん搾取に、すなわち労働市場の全体において交換を不平等交換（不払い労働の拡大）として実現したことにあるだろう。不平等交換は、本来人間理性に基づけば（そしてそれに基づく市場の原理を前提すれば）損をする側が結ぶはずのない交換であるが、にもかかわらずそのような非合理な選択が実行されるのであれば、そこには何らかの強制が隠れているはずである。したがって、それは自由な交換ではない。この自由な交換という市場の原理を歪める力、

つまり雇用契約において労働者を搾取する雇用形態を双方の「同意」の下で取り結ぶ労働市場を成立させるような力は、まさに産業革命を通じて進展した商業による産業の支配の強化によって資本主義が手にしたものだったと言えるのである。言い換えれば、19 世紀イギリスの労働者階級を苦しめた長時間労働や過度労働、児童労働、そしてそこにおける搾取は、労働力と貨幣の交換を資本主義が最大限自身に利潤をもたらす形で実現した結果であり、資本家階級は製造業に対する商業の支配に始まる権力の獲得を通じてこれを実現していったのである(注3)。しかしポランニーは、ブローデルが見出したところの資本主義と市場の分節化の視角を持たないが故に、資本主義の権力作用とそれがもたらした帰結の責任を、資本主義によって支配されたところの市場メカニズムに帰し、そしてそれを「悪魔のひき臼」と呼んだのである。

同様に、「農村の人々は、人間性を奪われて、スラムの住人と化し」たということも、農業生産物が商品として市場で売買されたことの帰結ではない。それは農業部門が資本主義によって征服されたことの帰結であり、つまりは自給自足の農業からあるいは消費と生産の間の透明な、また公正な交換に根差した農業から、利潤獲得のための農業になった流れの中で、農奴や奴隷のごとく農業従事者から可能な限り利益が搾り取られるようになったこと、また資本主義により実現された農業の近代化／大規模化の中で資本の再生産率を高めるべく農業労働に関わる費用を最小化するなかで最大の利潤を出す資本主義的経営が求められたことの帰結である。小麦が市場で売買されることだけでは、そのような事態は生じない。

「家庭は、破滅の淵に沈み」ゆくという事態は、これら製造業部門、農業部門において、そしてまた商業部門の下層において、人々が利潤獲得のための資本主義の道具とされ、非人間的なほどの搾取を基盤にした経済生活を送ることになったことの全般的帰結である。市場はそのような搾取のために利用される道具ではあっても、その原因ではない。

ポランニーの行論に対してブローデルの議論が示したのは、まさに生産を支配した商業資本主義と市場との間を分節化しながら関連づける可能性であり、つまりはそこにおける権力の働き、したがって資本主義による市場の支配という視点から分析を行う可能性であった。これは同時に商業資本主義が市場を支配し、同時に市場を通じて産業を支配する関係を分析する可能性も与える。我々は、ブローデルの視角から眺めるとき、ポランニーが労働者の惨状の背後にみた市場メカニズムを、市場メカニズム一般としてではなく、資本主義（商業資本主義とそのコントロール下にある産業資本主義）によって支配された市場が見せる姿として分析する可能性を得るのである。

また同様の意味で、これらの動きの根底にある利得動機自体も、市場メカニズムに固有のものではなく、利潤の獲得による資本の拡大再生産を自己目的とする資本主義に固有のものとして分析する可能性が生じる。資本主義もその利得動機もともに市場を培地として育つが、しかし、市場がその必然的帰結として生み出したのではないという点が強調される。たとえば単純に、個人利得ではなく、公共の利益の実現を目標とした競争原理の働きは、十分に考えることができるのである。ポランニーとブローデルを比較した山下は、「独占を効果的に排除することは難しいし、排除に失敗すれば、その分だけ世界システム全体の経済的公正性は低下すること

になる」（山下 2002: 74）という、それ自体とくにはブローデルの議論には由来しない理由によって、ブローデルの議論に見出し得る「将来シナリオ」（山下 2002: 73）を退けている。しかし、ブローデルが歴史的観点から分析した市場と資本主義の間に働く権力作用を、これまで新自由主義批判の展開において指摘されてきた権力批判の文脈から読み取るならば、市場と資本主義の関係に生じる課題の解決に向けた検討は、制度主義的観点に基づいてより詳細に焦点化され得ると思われる。これを以下の議論で試みたい。

４−２　市場と資本主義の区別がもつ規範理論上の意義

一点、確認しておくべきことは、上記のブローデルの見解に基づく市場と資本主義の区別の議論において、その区別以外ではポランニーが提示した多くの論点は特段否定されてはいないということである。しかし、にもかかわらず、この市場と資本主義との区別は社会と経済に関する規範的な議論の文脈においては、方向性として大きな違いをもたらすものとなることもここで確認しておきたい。

市場と資本主義を区別する議論においても、産業革命以後の社会においてポランニーが非難するような共同体に対する「破壊作用」が見られ、「破局的災厄」が生じたことは否定されない。ただ、その原因は市場メカニズムではなく、市場メカニズムを支配し、ときにその裏をかき利用した資本主義に求められるというところが異なるだけである。同様の意味で、ポランニーが破壊作用に対置したところの社会防衛の運動の歴史的展開も、否定されるわけではない。ただ、それは市場メカニズムに対する防衛ではなく、「社会的寄生物」たる資本主義に対する社会の防衛という文脈から理解されるのである。市場メカニズムとは別に、互酬性あるいは再分配の経済体制があることもまた否定されないし、ポランニーが『大転換』後に展開した互酬性と再分配の経済体制に関する人類史的な研究も、多くの部分ではとくに否定はされないだろう。ブローデルは、そのような経済体制を「物質生活」のなかに位置付けている。したがって、ブローデルの述べる３区分のうち、市場とその下部にある物質生活との区分はポランニーと共有されていると言ってよいだろう。ただし、物質生活と市場の区別において、ポランニーが一方を抑制されるべき「悪魔のひき臼」、他方を取り戻されるべき規範というように対照的に捉えたのに対し、ブローデルが両者の間に相互補完的な関係の可能性を捉えていたところには違いがある。ブローデルが述べるところの「透明な」、「正常な」、「公正な」競争市場は、物質生活の改善、発展あるいは成長に資するものになり得るし、また封建制や絶対王政に代表される物質生活における権力体制から合理的な秩序へと脱却し自由を獲得することを可能にするものともなり得るだろう。しかし、そのためにはそれは、資本主義により支配されるのでもなく、他方で国家により価格統制されるのでもなく、自由な競争の原理のもとにあり続ける必要がある。

このような意味で、市場と資本主義の区別はポランニーの議論に対して全面的な否定を向けるようなものではないが、しかし、ポランニーの議論およびその派生形態の議論に対してその違いが持つ意義は決して小さくない。これを次に、経済的自由主義への批判と、その現代的な形態としての新自由主義批判の観点から確認する。

４－３　市場批判と経済的自由主義のイデオロギー

４－３－１　自由放任というイデオロギー

ポランニーは、市場の価格メカニズムとその自動調整機能、およびそこにおける効率性という考えに対する学理的な批判（否定）は展開していない。ポランニーはただそれが実践においてもたらした現実を批判している。すなわちその批判は、自由主義的経済政策への批判として成り立っている。そして、その経済政策批判において、その実践への志向のゆえに、市場のメカニズムと社会の破壊の間にどのような原理的因果関係があるかは明示されておらず、ただその経済政策のもとで実際に社会が荒廃したという状況証拠が語られているだけである。ポランニーの議論において市場メカニズムと実際の社会的荒廃という現実の間を橋渡しする役割を担っているのは、理論や原理モデルではなく、市場のための「商品化」が人間の尊厳を傷つけるという、それ自体として議論の余地がある古典的道徳観のみである(注4)。すなわち、すでに言及したところの「利得動機」によってコミュニティは崩壊した、ということ以上のことをポランニーは説明していない。

また、この点との関連で同様に、ポランニーは次のように述べる。「市場社会に対する正当な批判は、それが経済に基づいていたということにあるのではない。ある意味では、いかなる社会も経済に基づかざるをえないだろう。そうではなくて、批判の要諦は、市場社会の経済が利己心に基礎を置いていたということにある」（ポランニー 2009: 452-3）。それゆえに、畢竟、ポランニーの議論において市場に対置されるものも「自分自身の意識から経済的な利己心を取り除くよう絶えざる圧力となって作用する」ところの「社会的紐帯」（ポランニー 2009: 81）となる。いうまでもなく、「互酬と再分配」（ポランニー 2009: 83）もこの社会的紐帯に根拠づけられる。

ポランニーの道徳観あるいはそれと同種のものを持つ多くの者が、市場メカニズムと社会的荒廃の因果上の結合とそれに基づく規範の根拠づけを無批判に受け入れてしまっているように思える。しかし、すでに述べたように、「利得動機」は市場メカニズムが必然的にもたらすものではなく資本主義がもたらすものであるという観点を持つとき、異なる理解が生まれてくるだろう。

市場メカニズムと社会的荒廃を結びつけるポランニーの立論は、逆説的ではあるが、経済的自由主義者たちの「自由放任（レッセフェール）」のイデオロギーに基づいている。ブローデルはアダム・スミスを参照しつつ、ポランニーへの批判の中で、自己調整的な市場の想定は「定義に対する神学的嗜好にもとづいている」と批判している。つまり、「すべての『外部的要因』の介在しないようなこの市場は頭で考えだされた代物である。ある交換の形態を経済的であり、他のある形態を社会的であると名づけるのはあまりにも安易である。実際はすべての形態が経済的であり、すべてが社会的なのである」（ブローデル 1986: 280）と述べる。この点は、実はポランニー自身が経済的自由主義に向けた批判でもあり、そして同時にやはりポランニーに対しても向けられ得る批判である。

自己調整的な市場のメカニズムの想定に対して、それを頭で考えだされたものとする点には

おそらくポランニーも同意するだろう。というのも、ポランニーもまた自己調整的市場原理なるものを「ユートピア」（ポランニー 2009: 6）とみなしているからだ。経済的自由主義において、自由放任によってはじめて市場は自己調整的に駆動し、効率的で合理的な結果を手にすると考えられてきたが、ポランニーは現実には市場システムは「国家の干渉」があってはじめて実現されたと指摘する。曰く、「経済的自由主義者は市場システムを確立するためにためらうことなく国家の干渉を要求しなければならないし、実際また要求するだろう。またひとたびそれが確立されれば、それを維持するために、同様に国家の干渉を求めるだろう」（ポランニー 2009: 266）。したがって、「自由主義者による干渉主義の批判は空虚なスローガンにすぎず、まったく同じ一連の行動にたまたま彼らが賛成するか否かによって、その行動を非難したりしなかったりするという御都合主義を表しているに過ぎない」と批判する。

しかし、にもかかわらず、ポランニーはすでに見たように、市場がコミュニティから離れ、その自己調整的原理によって自立し、そしてその原理のうちにコミュニティを飲み込んだという「市場社会」批判も同時に展開する。つまり、社会から離脱する市場の自己調整的な存立を否定しながら、理論的観点においては自己調整的に作動し自立する市場メカニズムを批判の対象（「悪魔のひき臼」）としてその要においているのである。だからこそ、批判は、市場を条件づけ駆動させている外因ではなく、市場それ自体に向けられ、「市場経済の消滅」（ポランニー 2009: 462）が希望として語られることになる。ブローデルは、結果として生じているこのような二分法（一方の悪魔と他方の希望）の発想に、「二肢性」の発想を対置したと言える。

ポランニーの議論の混乱とも思えるこの点には、かねてより矛盾が指摘されている。たとえば、「ポランニーはあらゆる経済は『制度のうちに埋め込まれ、また編み込まれている』というビジョンを提示する一方で、市場交換および市場経済を自己調整的で離脱したもの disembedded と捉える傾向がある」（Gemici 2008: 6）。すなわち、市場が社会から分離し社会を支配するという批判的議論と、経済活動は常に社会に埋め込まれており、市場もまた制度的構成物であるとする『大転換』以後に展開され主張された方法論との矛盾であり、ゲミジは後者をとり前者すなわち批判的議論を退ける結論を出している。しかし、ポランニーの議論が大きな注目を集めてきたのは、その批判的議論によるところが大きいことを考えると、なぜその前提をなす＜離脱＞の主張が出てきたかは分析しておくべきである（注5）。

ポランニーのこの混乱は、ポランニーが自由主義経済の提唱者たちへの批判のなかで、「自由放任」という彼らの中心的イデオロギーを共有してしまったところに発すると思われる。つまり、「自由放任」によって市場原理が社会から自立して駆動するという主張を現実に即したものと受け止め、自身が指摘するところの自由主義者たちによる干渉主義への批判に潜む「御都合主義」（市場システムの確立に国家の干渉を必要としながら、自由放任論によって国家の干渉を批判する御都合主義）の問題を自ら傍に退けてしまったのである。自由主義経済の提唱者とポランニーとの双方が、それぞれ目的は異なれど、議論の前提に置いたところのこの自由放任論は、それが御都合主義的に現実を議論の前面から退け隠すときにイデオロギーとして機能する。

では、なぜポランニーはこのイデオロギーを受け入れてしまったのか。それは、自由放任に

より「現実」として社会から遊離した市場を想定し、その市場が「悪魔のひき臼」として社会を食い潰すという図式がある限りで、市場の自由交換とその前提となる私有財産を排する社会主義が「自然な解決」（ポランニー 2009: 418）として提示されることになるからであろう。ポランニーにとって、社会主義あるいは少なくとも社会主義的方向性の妥当性を高めるためには、自由放任による市場の自立は「現実」である必要があったのである。あるいはこう言ってもよい。資本主義がもたらす社会的荒廃を解決する唯一の策が社会主義的なものであるためには、資本主義と市場とが等置されている必要があったのである。次の小節の議論とのつながりから、やや扇情的なところがあるかもしれないが、これを便宜的に社会主義正当化のための市場性悪説のイデオロギーと呼んでおこう。

４－３－２　新自由主義批判との関連

マルティン・コニングスは、新自由主義の諸政策を「インフラストラクチャー権力」という観点から分析する。「新自由主義が政治的管理を強化したとする考えは、直感に反する概念構成と思われる」が、しかしコニングスによれば、それは「新自由主義イデオロギーがまさに我々の常識と直感をそのように掌握しているがゆえ」（Konings 2011: 86）だという。これから抜け出すためには「新自由主義の言説が見えなくするところの権力の諸次元を正確に解明する」ことが必要となる。しかし、その際に問題となるのは、「新自由主義のヘゲモニーに対抗する試みがしばしば、公的な権威という狭い発想に依拠しすぎており、しかもその狭い発想というのは、市場に相対する公的な国家の意義を再提起しようと努めることで、新自由主義の思想によって設定された概念的パラメーターのうちにとどまってしまう」（Konings 2011: 86-7）という点である。まさにこれが、ポランニーが進んだ道であった。自由主義的経済政策への批判を展開するにあたって、市場を規制し抑制する国家の社会主義的な働きに希望を寄せるとき、我々は国家対市場という自由主義的経済政策の提唱者たちが打ち立てた概念構成のうちに囚われてしまうのである。言い換えれば、ポランニーの展開する市場性悪説は国家性善説と一つの対をなしており、その限りで自由主義的経済政策が前提する市場性善説と国家性悪説の対と同じ概念パラメーターのうちに囚われているのである。そのように、自由放任により国家から解放された市場という経済的自由主義のイデオロギーのうちに囚われるとき、その政策によって実際は自由な市場の確立ではなく、国家を通じた市場に対する資本主義の権力強化が遂行されている現実が見えなくなってしまう。コニングスは、「＜国家 vs 市場＞というパースペクティブのなかなかなくならない影響は、＜埋め込み embeddedness＞と＜離脱 disembedding＞というポランニー的比喩への依拠が続けられていることのうちに見てとれる」（Konings 2011: 88）と述べる[注6]。

コニングスは、国家 vs 市場という概念構成のもとでは隠されてしまう新自由主義における権力の働きを「インフラストラクチャー権力」という観点から捉えようと努める。そのような観点から、コニングスはアメリカの新自由主義政策を分析し、「規制緩和はいつも再規制である」と述べる。つまり、「新自由主義は、アメリカという国家のインフラストラクチャー能力を

弱めるというよりは強化するようなやり方、また同様にインフラストラクチャーを通じた管理の国家メカニズムにアクセスする特権をもった人々の戦略的な裁量を増幅させるようなやり方で、既存の財政的体制のいくつかのキーとなるパラメーターを整える制度的再構成のプロセスを伴った」(Konings 2011: 89) と理解する。自由放任という新自由主義のイデオロギーは、国家 vs 市場というその概念構成によってこれを隠す。

同様の観点を持ち、新自由主義批判を展開した代表的人物としてデヴィッド・ハーヴェイを挙げることができる。ハーヴェイもまた、国家 vs 市場という概念構成に惑わされることなく、同様の分析を、「階級権力を回復する一手段」(ハーヴェイ 2007: 45) としての新自由主義という観点から展開するのである。しかし、にもかかわらず、ハーヴェイがそのような新自由主義の経済諸政策を批判するときに、一つの参照先とするのがまさにポランニーの議論であり、そして、それによってハーヴェイは新自由主義批判の論理を再び、ポランニーがそうしたように、社会主義の残響の中に置き入れてしまう。すなわち、市場 vs それを抑制する国家という概念構成へと再び接近していくのである。

ポランニーと同様にハーヴェイもまた新自由主義の議論を「理論的ユートピアニズム」と捉えたうえで、それが経済的エリートの権力を回復させるか新たに創出するという「目標を達成するために必要なあらゆることを正当化し権威づける一大体系として機能してきた」と理解した。したがって、「新自由主義的原理がエリート権力の回復・維持という要求と衝突する場合には、それらの原理は放棄されるか、見分けがつかないほどねじ曲げられる」(ハーヴェイ 2007: 32) と述べる。ここで言う新自由主義的原理とはもちろんモンペルラン協会によって提示された「自由市場原理」(ハーヴェイ 2007: 34) である。この新自由主義が求める市場は、しかし、「競争やイノベーションを促進するものとしてイデオロギー的に描き出されていたが、実際には、独占権力を強化する手段になった」(ハーヴェイ 2007: 40) と分析される。

新自由主義の理論とその裏腹な政策実践との関係を指摘するハーヴェイのこの分析は、自由主義経済の提唱者が述べる自由放任論に認められる「御都合主義」に対するポランニーの指摘の延長線上に位置付けられ得るものである。また、我々はコニングスやハーヴェイの分析を、市場とそれを支配しその裏をかく資本主義というブローデルが提示した分節化の中に置くことができる。それにより、自由放任に代表される自由主義的経済政策が現実には国家を通じて市場へと向けられた資本主義による支配の体制、すなわち市場に向けられる別の形態の干渉であることが見えてくるだろう。

しかし、自由主義経済政策に対する批判として意義を持ち得たポランニーの「御都合主義」への批判を、実際に新自由主義批判にまで展開し得たハーヴェイは、すでに述べたように、議論が批判ではなく規範の段階に至ると再び国家 vs 市場の図式へ立ち戻り、そして市場性悪説を展開してしまう。ハーヴェイは、ポランニーを参照し、労働、土地、貨幣の商品化されることによる社会への破壊的作用を指摘する。とりわけ労働に関して、雇用に関する規制緩和を通じて「労働に対する資本の支配が市場において完成する」(ハーヴェイ 2007: 233) と分析した。この分析の段階では、ハーヴェイは市場と資本主義を分節化した議論、すなわち資本主義によ

る市場の支配という議論を展開し得ている。しかし、あるべき社会の形をポランニーの議論とともに考察する規範の段階に至ると、論調が変化する。ハーヴェイは、新自由主義のもと厳しい生活を強いられることになった人々をして、「市場の容赦ない論理とその要求に骨の髄まで組み込まれた人々」と表現する。あるいは、次のようにも述べる。「自己表現する存在として生きるのではなく、市場と資本蓄積の単なる付属物として生きることを余儀なくされるならば、市場活動の恐るべき論理とその空虚な激しさの前に自由の王国は萎縮してしまうだろう」（ハーヴェイ 2007: 259）と。これらの表現あるいは理解は、「悪魔のひき臼」の変奏であろう。ポランニーを参照することで、市場と資本主義の分節が曖昧なものとされ、悪魔のひき臼たる市場 vs 国家のパースペクティブが再び息を吹き返す。

では、ハーヴェイにおいて市場性悪説の対となるところの市場を抑制する、あるいはその廃止を目指す国家性善説は登場するだろうか。もちろん、ハーヴェイは単純に社会主義の国家性善説を唱えるほどナイーブではない。ハーヴェイは、新自由主義への対抗として「階級闘争」（ハーヴェイ 2007: 278）を重視するが、それはマルクス主義的なそれとしては想定されていない。しかし、そうではあっても、これらの議論には国家という権力機構を通じた市場への対抗という発想が通奏低音として響いている。ハーヴェイは、新保守主義のもとでの道徳的主張の台頭を逆手に取る可能性に言及する。つまり、そのような道徳的主張の台頭は「社会の個人化を促進する新自由主義のもとで社会が解体していくことへの恐怖心が広がっていることを示すものであるだけでなく、新自由主義が実行されるなかで作り出された、疎外、価値観の崩壊、排除、周辺化、環境悪化を道徳的に嫌悪する広大な層がすでに存在していることをも示している。純然たる市場倫理に向けられたこの道徳的嫌悪感が文化的抵抗に、したがってまた政治的抵抗に変換されていくことは現代の特徴の一つであり、〔…〕こうした文化闘争を、支配階級の権力の途方もない強化の過程を逆転させるための闘争へと有機的に結びつける」（ハーヴェイ 2007: 282）ことが重要だと、ハーヴェイは捉える。では、そのためには何が必要か。「国家機構に対する民衆のコントロールを再獲得し、それによって、市場の権力という巨大な圧倒的な力のもとにある民主主義的な実践と価値観を―空洞化するのではなく―より深く推進するための同盟が、アメリカ内部で構築されなければならない」（ハーヴェイ 2007: 284）。

本稿では、最後に、資本主義の破壊作用に対する社会防衛の必要性の主張に賛同しながらも、必ずしも国家 vs 市場の形態をとらない議論の進め方があることを検討したい。

５．結びにかえて

市場は悪ではない、というのが本稿で結論として提示することである。本稿の議論をまとめるにあたって、まずはこの結論に関係して生じ得る誤解について解いておきたい。本稿ではポランニーの『大転換』で語られた市場を悪とする言説にブローデルの歴史理解を対置し、これを否定した。しかし、冒頭で述べたように、だからといって様々な社会的弊害を伴う資本主義あるいは自由主義的経済政策を擁護するわけではない。本稿において筆者は、市場性悪説はとらなかったが、市場性善説も取っておらず、市場を道具とみなしたブローデルの議論に即して

強いて言うならば、市場道具説をとっている。

道具である限りで、市場は資本主義による搾取のための道具ともなれば、自由な交換によって交換当事者双方に利得をもたらし、価格メカニズムによって多様性のもとで効率的に秩序を形成するとともに、公正な競争を通じてイノベーションを生み出すという、資本主義に歪められることのない市場の真の働きを発揮することで、共同体の発展と人々の幸福の創出に貢献する道具ともなり得る。そしてブローデルの議論は、それがどのようにして資本主義によって歪められ、裏切られるかを詳細な歴史記述から教えるものであり、課題の所在を焦点化する際にそれを参照する意義は大きい。

ところで、この議論には国家の理解もまた、複雑な形で関わることになる。筆者は自由放任論をイデオロギーとして論じる限りで、社会から分離して自立駆動する市場という観点を取らないのであるが、しかしながら、だからといってアダム・スミス以来自由主義経済学によって解明されてきた市場メカニズムの自己調整的働きの学理（ハイエクが言うところの「カタラクシー」）も否定はしない。これは、真空下の自由落下に関わる実験に似ているかもしれない。地球上に真空は存在しないので、この実験のためには我々は真空ポンプとガラス管を用意しなければいけない。我々は、ポンプを使ってガラス管の内部に真空を作り出したうえで、その真空下で金属級あるいは羽毛を落下させ、両者が同一の速度で落下することを確認する。このとき、我々が手筈を整え、人為的に環境を作り出したからといって、そこにおける自由落下の法則が人為的に歪められた結果だとは考えられない。それは、適切な環境を用意されることで、純粋な落下の働きを示す。新自由主義政策において、国家は資本主義が市場を支配しその働きを歪めるための道具として用いられたが、道具である限りで、それは別様に、つまり市場の働きを真に実現するように環境を整えるための道具ともなり得るだろう。そしてそのときに限り、市場は上述したような有用な道具となるだろう。この場合、国家は共同体あるいは市民社会とは等置されていないことは、あらためて付記するまでもないだろう。市場道具説は、制度主義的観点に立つとき、そのような意味での国家道具説と対になる。このとき、国家は制度設計を通じて市場を資本主義の支配から解放することに重要な働きをし得るが、それは市場機能の抑制という社会主義的方向とは異なる方向での関わりなのである。ただし他方で、これまで資本主義によって支配されてきた市場の働きをもって、それを市場の本来の働きとしてモデル化し前提することができないことについては付言する必要があるだろう。

これに関連して生じ得るもう一つの誤解も解いておこう。本稿は、社会主義的解決策をとらない考え方の方向性を確認してきたが、だからといって社会主義的方法による解決という選択肢の可能性を否定しているわけではない。それが経済的自由主義のイデオロギーに対する対抗イデオロギーとして登場する限りで陥る、20 世紀型イデオロギー構成の限界については課題として触れたが、それは方法全体の可能性を否定するような強い論拠とまではならない。先に言及した拙稿でも同じように述べたが、本稿が行なったのは、それとは別の選択肢の可能性の検討であった。

そうすると実は本稿の結論は、より詳細に論点を焦点化する点で今後の研究の展開に向けた

意義を少なからず持つものの、議論の展開それ自体にはまだ着手できていないということにも言及しておく必要がある。本稿がこれまで論じてきた内容に即するならば、いわゆる「埋め込み」理論自体は否定されない。市場は、常に制度として国家を通じて社会のうちに埋め込まれている。しかし、市場性悪説の立場に立たない限りで我々は、ポランニーの議論を受けて「埋め込み」概念を明確にしたラギーがやはり自由市場の弊害から社会を守るという発想からそう述べたように、「埋め込まれた自由主義の妥協」（Ruggie 1982: 393, 強調は引用者）という言い方をする必要はない。つまり、市場に関わる国家の働きを、常に市場の抑制という視点から捉え、自由市場を必要悪としてのみ捉える発想を持つ必要はない。あるいは逆に、自由主義は常に国家の干渉によってその本来の機能が損なわれると捉える必要もない。我々は国家による市場の制度設計を通じて市場を積極的に公共の利益のために用いる方法を、問題解決の選択肢の一つとして検討してよい、ということだけを述べたのが本稿であった。

もちろん、道具であることをもって中立的と捉えるのは単純に過ぎる。道具には構築主義的分析が必要である。それは市場の場合は、制度設計分析となるだろう。国家の場合は、民主主義的意思決定に対する分析となるだろう。公共の利益のための競争とは何か、あるいはまた公共の利益とは何か、それはどのような条件のもとで実現されるか、それを実現したかあるいはその実現に近づいたものとしてどのような事例を挙げることができるか、これらの疑問に答える研究のための分節化された理論的出発点を整えたのが本稿の一つの成果である。

そのような分節化された理論的整理の意義を、最後にフーコーの議論との比較から確認して論を閉じたい。上に述べたことはちょうど、フーコーが「一人ひとりをプレーヤーとみなし、そのプレーヤーがゲームを行うことのできる一つの環境に対してのみ介入する」という形で想定する「環境テクノロジー」（フーコー 2008: 321）として問題提起したこととある程度一致するだろう。フーコーは 1979 年に開講された講義の記録において、ドイツおよびアメリカにおける新自由主義の議論に基づきこれを論じているのであるが、しかし、時代的制約からフーコーの議論は、新自由主義の実際の政策ではなく理論的言説に基づいて展開されており、そこには資本主義による市場の支配という分節化はほとんど見られない。またそこから、いくつかの着眼点の違いも生じる。たとえばフーコーは、新自由主義が社会を全面的に市場化する方向性に触れるのだが、その際にフーコーは、「市場経済に関して非難されてきた不備や、市場経済に反対する根拠として伝統的に持ち出されていたその破壊的効果について、実はそれらを市場のせいにしてはならず、逆に国家の責任としなければならない」（フーコー 2008: 143）というオルド自由主義が主張する論点に強い関心を示す。この論点は、本稿の議論に相当近いようでいて、異なる。フーコーは、もちろん全面的にオルド自由主義に同調するわけではないが、このオルド自由主義の検討にかなりの時間（講義録における紙幅）を割いている。たとえば、フーコーのこの議論に、本稿で検討してきた市場と資本主義の区別と前者に対する後者の支配という視点が導入されれば、そしてブローデルが市場の歴史のうちに見出した市場の支配のための様々な策略の知見を組み込めば、我々はこれからの社会のあり方に関する規範について、その後の歴史的経験を踏まえたさらに精緻な分析と制度設計の検討を展開できるようになるだろ

う。もちろん、そのときの環境テクノロジーは、新自由主義のそれとは異なるもの、それを無効化するものが探究される。

注

注１　ポランニーは、「交換に際して得られる利得 gain と利潤 profit」（ポランニー 2009: 77）あるいは「利得と利潤の原理」（ポランニー 2009: 225）という表現に見られるように、利得と利潤を同趣旨のものとして扱っているため、以下本稿でも二つを同様の位置付けで扱う。

注２　資本主義あるいは自由主義経済擁護の観点から展開されたポランニー批判の内容をここで検討し、それへの賛否を論じることはしないが、しかしそのうち、たとえばポランニーにおける権威主義的あるいは全体主義的（と推定される）規範意識へと向けられた批判は、ポランニーの見解に端を発する議論の傾向を指摘するものとして一定の意義を持つように思える。この点に関連した議論として、拙論を参照されたい（見附 2023）。

注３　ブローデルは、労働者が商品とみなされることへの違和感に賛同しつつ、労働市場自体は「産業時代に初めて作り出されたものではない」（ブローデル 1986: 43）と述べる。さまざまな歴史事例を挙げたうえでブローデルは、労働市場は「パリでは 14 世紀から、ニュールンベルクでは 1421 年には確実に」（ブローデル 1988: 45-6）存在したと述べる。ブローデルは、これには「ある種の社会的退廃が伴った」（ブローデル 1988: 46）と考えるが、しかしそれはポランニーが述べるような非人間的な生活を強いられるという意味での退廃ではなく、ストライキに結実する労働者の不満あるいは「『しみったれた賃金と引き換えに』自分自身の商売を捨てる」（ブローデル 1988: 50）ことを拒絶する職人の行動に現れる類のものであった。

注４　貨幣による脱人格性の実現が他方で自由と人格の解放につながった点は、ゲオルク・ジンメルが指摘した通りである（ジンメル 1978）。

注５　なお、ポランニーの方法論としての「埋め込み」理論の方は、その後マーク・グラノヴェッターの議論に引き継がれ独自に展開されている（グラノヴェッター 2019）。

注６　この点からコニングスは、自身の議論とミシェル・フーコーの新自由主義に対する分析との違いを強調する。曰く、「フーコー的な見方は、統治メカニズムが社会生活のうちに急増することは公式的国家の中心性の減退を指し示すと想定する傾向があるが、しかし、これは新自由主義的資本主義を＜離脱＞の動きとするイメージを再生産することにつながる」（Konings 2011: 90）。しかし、コニングスのこの見解に付言すれば、フーコー自身は間違いなく制度主義的な埋め込みの理解に立っている（フーコー 2008）。

参考文献一覧

ブローデル, フェルナン, 1985a, 山本淳一訳『日常性の構造 1　物質文明・経済・資本主義 15−18 世紀　Ⅰ−1』みすず書房.

――, 1985b, 山本淳一訳『日常性の構造 2　物質文明・経済・資本主義 15−18 世紀　Ⅰ−2』みすず書房.

――, 1986, 山本淳一訳『交換のはたらき 1　物質文明・経済・資本主義 15−18 世紀　Ⅱ−1』みすず書房.

――, 1988, 山本淳一訳『交換のはたらき 2　物質文明・経済・資本主義 15−18 世紀　Ⅱ−2』みすず書房.

デイル, ギャレス, 2020, 若森章孝・東風谷太一訳『現代に生きるカール・ポランニー　「大転換」の思想と理論』大月書店.

越後, 和典, 2011, 『新オーストリア学派とその論敵』慧文社.

フーコー, ミシェル, 2008, 慎改康之訳『生政治の誕生　コレージュ・ド・フランス講義 1978-1979 年度』筑摩書房.

Gemici, kurtuluş, 2008, "Karl Polanyi and the antinomies of embeddedness," *Socio-Economic Review*, 6: 5-33.

グラノヴェッター, マーク, 2019, 渡辺深訳『経済と社会　枠組みと原則』ミネルヴァ書房.

ハーヴェイ, デヴィッド, 渡辺治監訳, 森田成也・木下ちがや・大屋定晴・中村好孝訳『新自由主義　その歴史的展開と現在』作品社.

Konings, Martijn, 2011, "Neoliberalism & the State," C. Fanelli & P. Lefebvre eds., *Uniting Struggles Critical Social Research in Critical Times.*, Ottawa: Red Quill Books, 85-98.

見附, 陽介, 2023, 「環境思想のポストモダニズム：その実践における市場の可能性について」『北海商科大学論集』12 (1): 1-22.

ポランニー, カール, 2009, 野口健彦・栖原学訳『［新訳］大転換　市場社会の形成と崩壊』東洋経済新報社.

Ruggie, John Gerard, 1982, "International regimes, transactions, and change: embedded liberalism in the postwar economic order," *International Organization*, 36(2), Spring: 379-415.

ジンメル, ゲオルク, 1978, 居安正訳『貨幣の哲学（綜合篇）　ジンメル著作集３』白水社.

山下, 範久, 2002, 「グローバリゼーションの帰結、あるいは『新しい近世』？」―ポランニーとブローデルによる市場の歴史社会学―」, 佐伯啓思・松原隆一郎編『＜新しい市場社会＞の構想　信頼と公正の経済社会像』新世社, 第２章.

※　本研究は JSPS 科研費 JP22K00016 による研究成果の一部である。